

『トルコ狂想曲』 作：岩本憲嗣

■あらすじ

それは松田香月（20）にとって人生2度目の家出であった。やって来たのは長崎の大学院に通う兄の元。だが兄とは一向に連絡がつかない。募って行く苛々を食欲で抑え込みながら何度も電話をかけるが全く繋がらない。急な雨に苛立ちが爆発しそうになったとき、背後から呼び止めたのは夜の繁華街を女連れで歩く兄だった。

久しぶりの再会にも拘わらず香月の機嫌は頗る悪い。

それは連絡がつかなかったこと以上に家出の理由のせいであった。

喫茶店で兄に語り出す香月。

20年目にして出生の秘密を知ってしまったのだと言う。

自身は父の本当の子ではなく、芸能活動の為に家族を棄てた母が他所で作った子なのだと。だが兄は全く驚かず知っていたと答えると、自分の父親もどこの誰だか分からないと言うのだ。

それを聞いて更に怒りがこみ上げる香月。対照的にまるで他人事の兄。

注文したトルコライスを食べながら兄は香月にウチはまるでトルコライスみたいだと語り出す。

■登場人物

松田香月（まつだかづき・20歳・女性・大学生）

松田蓮太（まつだれんた・24歳・男性・香月の兄）

司会者

女子アナ

露店員

蓮太の後輩

蓮太の先輩

喫茶店員

SE 空港の出発ロビーの騒音。

SE 出発ロビーのテレビ前に集まる人々の雑踏。

司会「以上今日の天気でした。続いてこちら」

女子アナ「ベテラン女優の岡崎紗々良さんにまたも熱愛報道。今回は結婚秒読みとの情報もあります……」

SE 強く床を蹴り荒々しく席を立つ音。

香月「(ボソッと) こんなのロビーで流すな」

SE 足早に歩き出す音

香月「ムカツク……ムカツク……ムカツク……ムカツク……ムカツク……」

SE 飛行機の離陸する音

SE ドアチャイムを押す音。暫くしてまた数度押す。また暫くして連打。

続いて携帯をかける音。すぐに『只今電話に……』というアナウンスが流れ、香月は舌打ちと共に電話を切る。

香月「何でいないの！」

SE ドアを強く蹴ると、古びた外階段を荒々しく降りる音。

SE 中華料理店の雑踏。勢いよくちゃんぽんをすすする音。皿うどんをバリバリと頬張る音。携帯電話をかけるが『只今……』というアナウンスで電話を切る香月。

香月「聞き飽きた。もうっ！すみませーん！」

SE 卓上の呼び出しベルを荒々しく連打する香月

SE チンチン電車の通り過ぎる音。辺りは繁華街の雑踏。

露店員「丁度頂きます。熱いから気を付けて」

SE 携帯をかける音。『只……』とアナウンスが流れた時点で切る香月。

香月「こんなにかけてるのに……」

SE 手にしたぶたまんに食らいつく音。

香月「熱っ!!」

SE 雨の降り出す音。

香月「冷たっ!」

SE 雨が本降りになる。

香月「ムカツク……聞いてない」

蓮太「そりゃ俺もだわ。ほい傘」

香月「え?……ああ!!」

蓮太「ってかお前何でいるの」

後輩「酔って）あれえ?ナンパですか?」

蓮太「ああ、まだいたんだ」

後輩「なんですそれ。今夜はどことん付き合って貰いますから!さ、2軒目は私の知ってるお洒落な……」

蓮太「ごめんパス。じゃあまた明日ね」

SE 雨の中、香月と蓮太が駆ける音。

後輩「ちょ……って、手をつな……はあ!?!」

SE 洋菓子店内。店の外から雨の音。

香月「抹茶とチョコとプレーンが一つと……」

蓮太「さっきまでぶたまん食ってたろ」

香月「電話無視したんだからこれくらい当然。あ、あとプレミアムカステラも追加で」

SE 自動ドアの開く音。商店街の雑踏。

蓮太「にしても、4年ぶりか?」

香月「5年。中3の時に急にあの人がウチに来た時以来だから。あれ受験前だよ」

蓮太「またそれか。親父には話したのか」

香月「しないよ。心配かけたくないもの」

蓮太「馬鹿、何も言わずに出て来た方が心配すんだろ。俺が電話……」

香月「やめてお兄ちゃん!!」

蓮太「お兄……久しぶりだと照れるな」

香月「馬鹿じゃないの」

蓮太「理由はともあれ、折角来たんだし観光案内くらいと思ったけど、この時間じゃ……眼鏡橋が結構近いけど行くか?」

香月「いい」

蓮太「素っ気ないな。じゃあ……一口餃子でも買って帰るか」

香月「……食べたいなら付き合ってもいいよ」

蓮太「(笑って) わっかりやすいなお前」

先輩「おっ!これが噂のナンパした子?」

蓮太「わっ!?!先輩?驚かさないで下さいよ。

ってか噂のって何ですか」

先輩「またまた、可愛い後輩泣かせておいて。(スマホの操作音)ほら、もうゼミの女の子みんな知ってるし」

蓮太「ああ……いや、そうじゃなくて、妹ですこれ。馬鹿だから家出してきて」

先輩「本当?」

蓮太「信じて下さいよ」

先輩「ええ、あのヒロ君の言葉を?」

蓮太「信じてくれないと泣いちゃいますよ」

先輩「ああ……イケメン泣かせるのは罪だな……よし、信じてもいいけど来週末予定空けていてね、よろしく」

S E 先輩の立ち去る音。

香月「誰?」

蓮太「院のゼミの先輩。思案橋フラついていると誰に会うか分からないな。餃子は明日にして今日は……」

香月「却下。お腹空いた」

蓮太「ブタになるぞ」

香月「ポツチャリくらいがモテるんです」

蓮太「何怒ってるんだよ」

香月「色々。電話でなかったし」

蓮太「ああアレは……あんだだけ着信あると嫌な予感しかなくてさ、こりや面倒な奴だなんて思ってた……」

香月「面倒だから逃げたんだ。チャラチャラしてるものそうだし。どっかの誰かみたい」

蓮太「はあ……またおふくろか。わかった、じゃあ飯食って帰ろう」

香月「待って！！……ちゃんぽんと皿うどん以外で」

蓮太「お前……注文が多い奴だな」

SE 喫茶店の扉が開く音

蓮太「こんばんわー。いつもの2つで」

香月「喫茶店って……ちゃんとしたご飯がいいんだけど」

蓮太「心配すんなって、本当面倒な奴だな。面倒ついでに腹括るわ。何で家出した」

香月「それは……」

蓮太「どうせ俺に愚痴りに来たんだろ」

香月「……パスポート取ったの」

蓮太「ぶっ……おい、長崎は外国じゃないぞ。いや、出島とかあったけどさ」

香月「分かってます！馬鹿にしすぎ！」

蓮太「じゃあ何でパスポートなんて」

香月「大学の友達と海外行こうって。でさ……コセキトーホンっての？市役所で……」

蓮太「ああ……親父の養子になってビック

リしたんだ」

香月「そう……え？いや、何で知ってるの？」

蓮太「やっぱ話してなかったか。だよな」

香月「お兄ちゃん知ってたの？」

蓮太「だつてさ、ヒョロヒョロで一筆書きみたいな顔した親父からイタリア人みたいな濃い顔の俺とか、真ん丸のお前が生まれるとか違和感あるだろやっぱ。だから高校の時かな、訊いてみた。そしたら俺もお前もおふくろがどっかできつくて来た子だって泣きながら言ってた。親父が泣くことじゃないのに、本当どこまでお人よし……」

香月「ま、待って待って……お兄ちゃんも？」

蓮太「俺もお前も。おふくろも大概だよな」

香月「ムカツク！！笑いごとじゃないよね。あの人、どこまで私達家族を裏切って振りまわせば……」

喫茶店員「あの……」

蓮太「あ、ごめんなさいね。ほら、続きは飯食ってからにしよう」

喫茶店員「特製トルコお2つでございます」

香月「……なにこれ」

蓮太「トルコライス。普通はスパゲティとトンカツとピラフが一皿に盛ってあるんだけどさ、ここのは炒飯なんだよ。で……」

香月「長くなるならいい。いただきます」

SE 二人食事をする音。香月は荒々しく食べている為食器にスプーンが当たる音がうるさい。

蓮太「もっと静かに味わって食えよ」

香月「そんな気分じゃないから」

蓮太「ま、お気に召して頂ければ幸いです」

香月「美味しいよ。だけどこの炒飯さ……」

蓮太「やっぱり気づいたか。似てるよな親父の作るのに。だから俺ここ好きなんだよ」

香月「行きつけなの」

蓮太「週一くらい？」

香月「だったらさ、テレビのチャンネル変えて貰って」

蓮太「テレビ……ああ、噂をすればおふくろの話題か。本当にすんのかね結婚なんて。ま、お前も成人したしあるかもな」

香月「なんで私が出てくるの」

蓮太「こどもが成人するまでは再婚は……結構あるだろそういうの」

香月「あの人に限って絶対ないから！ ったく、いい歳して……そうだ。いいこと思いついた。週刊誌にタレこもうよ」

蓮太「はい？」

香月「女優の岡崎紗々良には隠し子が二人もいますって。そしたら結婚どころじゃ……」

蓮太「急に何を言うかと思えば」

香月「急じゃないから。子供の頃からずっと思ってたの。私達をいなかったことにしてテレビではしゃいでるあの人にどうやったら復讐出来るかって。でもそんなことしたらマネージャーだったお父さんに迷惑がかかるから……けど大丈夫だよ。だって私達お父さんの子じゃなかったんだもの。傷つくのはあの人だけだよ。ねえ！」

蓮太「お前さ……さっきまでのムスツはどこ行ったんだよ。でもちよつと羨ましいな」

香月「じゃあ早速東京帰ったら……」

蓮太「知ってるか？ 好きの反対は無関心なの。俺さ、そこまでおふくろに執着出来ないわ」

香月「執着なんて」

蓮太「産んでくれたからおふくろってことに変わりはないけど、でも母親じゃないんだよな。ただの芸能人にしか見えない」

香月「お兄ちゃん？」

蓮太「ただな香月。俺とお前と親父と……出逢いすらしなかったかもしれない3人を繋いだのはやっぱりおふくろなんだよな」

香月「な、なに急に……あ……ああートンカツ食べないなら貰っちゃおっかなー」

蓮太「そうそれ。……トルコライスとか……考えてみたらまんまウチだよな。スパゲティとトンカツと炒飯とさ……全然関係ないのひとまとめにしてさ……でも不思議とこの組み合わせが美味いんだよな」

香月「……それってさ、お兄ちゃんがパスタでお父さんが炒飯で……」

蓮太「どう考えてもトンカツはお前一択。で、おふくろは皿」

香月「え？」

蓮太「皿を含めて料理だ……なんて大層なこと思わなくていいけど、でも皿のお陰で寄り添ってられるんだから、闇雲に傷つけることなくないか」

香月「……それは」

蓮太「つまり美味いもんもつとは静かに味わって食えってこと。ほら一切れやつから」

香月「あ……ありがとう………ねえ」

蓮太「どうした」

香月「……ううん、えと……あれだよ。くれるなら隅っこじゃなくて真ん中がいい」

蓮太「笑って）……やだ」

SE 携帯電話が震える音

蓮太「おっと。もしもし？」

香月「ちよっと、食事中だよ」

蓮太「そう……そうそう。流石、全部読まれてるワケだ。そう、今二人だから」

香月「お兄ちゃん？」

蓮太「ほら。炒飯一つ入ります」

香月「え？もしもし？……あ……うん……それは……ごめんなさい。って、何で泣くの？もしもし？ちよっと……よく聴こえない？」

蓮太「今空港だって」

香月「嘘？」

蓮太「じゃアリムジンバス乗ってバス停で待ってて、うん、分かった。（電話を切って）これ食い終わったら迎えに行くか」

香月「ねえ……一口餃子買って帰ろうよ」

蓮太「まだ食うか。太るぞ」

香月「どうせトンカツですから。それにさ……やっぱ炒飯には餃子でしょ」

蓮太「確かに」

香月「でもさ……これもアリかな……ほ、ほら冷めちゃうよ。さっさと食べちゃおう！」

SE 香月が再び食事する音。そこに先程までの荒々しさはない。

【終】

※ご利用上の注意※

- ・本脚本はどなたでも無料にてご利用いただけます。
- ・ご利用に当たつての改変などに制限は設けておりません。皆様のご都合に応じて自由に改変頂いてかまいません。
- ・本脚本をご利用頂く際は必ず作者 (gumba1227@hotmail.com) までメール報頂きますようお願い致します。
- ・但し、練習での使用などの場合はご連絡の必要はございません。
- ・連絡が必要かどうかの基準は以下の通りでございます。

※連絡不要の場合

- ・仲間内で集まつての練習でのご利用。
- ・Skype などを介しての第三者の聴取・視聴が出来ない形でのご利用。

※連絡が必要となる場合

- ・ツイキャスやニコ生など第三者の聴取・視聴が可能な状況下でのご利用。
- ・連絡を要する形でのご利用の際は、必ず作品名・作者名をどちらかに記載いただけますようお願い致します。

その他ご不明な点ございましたらお気軽に下記までご連絡下さい。

gumba1227@hotmail.com (岩本)